

愛知県旧足助町の歴史的・文化的遺産を活かした 地域づくり・まちづくりに関する研究

鈴木 常夫

はじめに

筆者の研究テーマは地域づくり・まちづくり^①であるが、そのフィールドとして、愛知県旧足助町を選び、2003年から2005年にかけて調査研究を行ってきた。研究成果の一部を、2005年3月に、修士論文『愛知県足助町の地域づくり・まちづくりに関する研究－住民と行政の「協働」から住民「主体」の地域づくり－』としてまとめた。

本研究の調査対象地域である旧足助町は、中馬街道^②に沿った古い町並みなど、歴史的・文化的遺産を活かした地域づくり・まちづくりに取り組んできた。また、1978年には第1回の「全国町並みゼミ」^③を開催するなど、その意欲的な地域づくり・まちづくりは全国的に知られている^④。旧足助町の中部地域、とりわけその中心部を構成している西町、新町、本町、田町の四町は、中馬街道とも呼ばれていた伊奈（伊那）街道^⑤沿いの地区であり、その町並みは、江戸後期から大正期にかけての二階建て白壁の古い商家を中心に構成されており、歴史的・文化的価値が高い^⑥。また、かつては商店街は周辺地域からの集客力もあって、中心市街地としての役割も有していた。

旧足助町は、香嵐溪や三州足助屋敷などの観光資源で全国的に有名である。香嵐溪^⑦は、大正年間に町民と行政が協力して数千本の楓・桜を植林し、その後も守り育てる活動が続けられてきた。このことが、地域づくり・まちづくりは自分たちの手で行う、という伝統につながっていったと考えられる。また、山村文化の民俗資料館である三州足助屋敷の建設^⑧も、地域づくり・まちづくりで旧足助町を全国に知らしめることになった。旧足助町の地域づくり・まちづくりは、伝統、風土、人との三者が一体となつて行われ、その歴史と精神は脈々と受け継がれてきた。

本稿は四町の地域づくり・まちづくり、及び中心市街地活性化に焦点を当て、インタビュー調査を中心に、修士論文発表以降の調査結果を加筆してまとめたものである。なお、本稿の構成は、旧足助町の中心地区の地域づくり・まちづくりの経過や具体的な取り組み状況、地域づくり・まちづくりの課題や問題点、今後の展望となっている。

1. 地域の概要

旧足助町は、愛知県の北東部に位置し、面積193.27平方キロメートル、人口9,549人（平成18年1月1日現在）の町である。面積の87%を山林が占め、農用地はわずか3.5%にすぎない。旧足助町は、東部地域、西部地域、北部地域、中部地域の四地域、15の小学校区により構成されている。中部地域は町場をなし、旧足助町の中心部となっている（2005年4月1

日、豊田市と合併)。旧足助町は、古くから信州方面と三河・名古屋方面とを結ぶ交通の要衝として栄え、中部地域は、1890(明治 23)年に町制がしかれるなど、奥三河の中心的都市として、近郷の住民を集める中山間の在郷町として発展してきた。

町なかを通る中馬街道は、江戸時代に信州から年貢やたばこなどの物資を運び、三河からは三河湾で取れた塩を運ぶ「塩の道」であった。街道沿いには塩問屋⁹⁾が並び、その塩問屋では塩俵を詰め替えた。その塩は「足助塩」、「足助直し」と呼ばれ、足助の名は信州でも知られるようになった。

足助は、江戸から明治期には伊奈(伊那)街道沿いの宿場町としても発展し、街道沿いには造り酒屋、塩問屋、材木屋、宿屋などが並ぶ賑やかな町を形成していた。1911年に中央線が開通し、信州と三河を結ぶ流通ルートから外れると、宿場町としての性格は失われたが、大正から昭和初期にかけて林業、製糸業が栄え町場としての性格は継続した。ところが、戦後は高度経済成長期の開発から取り残され、人口の流出が進み、1970年には過疎地域に指定されるまでになった。その後、足助では、観光資源や古い町並みを活かした地域づくり・まちづくり に力を入れ、意欲的な取り組みが行われてきた。

現在は香嵐溪や三州足助屋敷などの観光、中馬のおひなさん¹⁰⁾などのイベントで全国に知られ、足助を訪れる観光客数は年々増加している。その一方で、少子化や青年層の町外流出、高齢化の一層の進行という問題が深刻化しつつある。

2. 旧足助町の地域づくり・まちづくり

(1)「まちづくりの会」による町並み保存運動から景観整備事業へ

①「足助の町並を守る会」の発足

1960年代の高度経済成長以降、地域開発の名の下に全国各地で古い町並みが失われつつあった。そのような時代の中で、足助では1975年10月23日、「足助の町並みを守る会」(会長田口金八さん、以下「守る会」という)が結成され、町並み保存運動が始められた。「守る会」の目的は、町並みの保存と住環境の整備にあった。「守る会」は、町並み保存のために、講演会やシンポジウムの開催、まちづくりの先進地区である妻籠への視察などを通じて住民の意識の高揚をはかった。また、1978年には第一回全国町並みゼミを有松とともに開催した。

「守る会」の初期の活動で、その後の町並み修景事業のきっかけとなった取り組みが、足助農協金融部の建物保存事業であった。1977年、田町にあった足助農協金融部の建物が取り壊され、駐車場になる計画が持ち上がった。大正初期に建築されたこの建物は、カウンター・吹き抜け・ギャラリーなどが揃った当時の地方銀行の特徴をよく残しており、歴史的・文化的価値の高いものであった。そこで「守る会」と駐車場建築主の足助銀座商業協同組合の間に話し合いがもたれ、建物は保存・活用されることになった。1982年6月、足助農協金融部の建物は修復され、町並みの資料を展示する足助中馬館として開館した。

また、1979年には田町の豊田信用金庫の改築が行われ、「守る会」の要望もあり当初の計画を変更し、町並みに調和した外観になった。個人の住居や商店では、1974年から1985年の約10年間で55棟が町並みに調和するよう新築、改築されている。旧足助町住民の個人のレベル

でも、町並みを守りたいという精神の現れであり、このことが本格的な町並み修景事業に取り組む活動に繋がっていくことになった。

②重要伝統的建造物群保存地区選定に向けて

「守る会」の最大の活動目標は、文化庁の「重要伝統的建造物群保存地区」（以下「重伝建」という）の選定を受けること、またそれに先立つ条例の制定であった。1977年6月には、「重伝建」選定に向けて「足助町町並保存対策協議会（会長 城戸久名城大教授）」が発足した。「足助町町並保存対策協議会」は、基礎資料を得るために町並みと民家の調査を行った¹¹⁾。そして町当局により町並み保存条例の試案が作成された。しかし、1980年7月、「足助の町並み保存問題打合わせ会」での論議の末、条例の制定及び「重伝建」の申請は見送られることになった。その理由は、①町並み保存に総論的には賛成であるが、看板などの問題では商店の合意が難しいこと、②町並み中の交通規制（乗入れ・車庫）などが難しいこと、③重伝建地区に選定された地区住民の中には、選定を歓迎しないものが相当いること、④塗籠造りの町屋の修理・修景には多額の費用がかかるが、足助の町財政では難しいこと、⑤農村部の議員が大多数を占める町議会において、同意を得ることが難しいこと、⑥修理・修景については、自主的な保存がなされつつあること¹²⁾、の6点であった。「重伝建」の選定に向けてのとりくみを断念した「守る会」の活動は、住民の自主的な規制によって自分たちの町並みを守り、新たなまちづくりの活動へと発展していくことになった¹³⁾。

③「足助まちづくりの会」発足

1987年、新たなまちづくり組織として、「守る会」、「足助の川を守る会」、中部地区区長会、商工会、観光協会、中心市街地活性化委員会などの7団体の代表者が参加し「環境基金の会」が発足した。1990年、7団体は連名で、「中部地区の総合的な景観整備についての陳情書」を町長に提出、その結果、1991年に、行政と住民の構成による「中部地区環境整備委員会」ができた。以上の経過を踏まえ、1993年8月、「足助まちづくりの会」が発足した。以降、「足助まちづくりの会」が自主的な町並み保存活動・景観づくりの役割を担うことになる。

「足助まちづくりの会」は、「…ゆかしい歴史に培われた『町並み』や『美しい緑豊かな自然』を生かした街づくり」（「足助まちづくりの会」規約 第2条 目的）をするために、『街なみ環境整備事業』の推進や、『足助の街づくり規範』の実践などを行う」（同 第3条 事業）ことを主な目的としていた。前述のように、足助では、「守る会」の活動が活発であった頃から、住民の自主的な判断によって、町並みに調和する建物の改修がすでに行われていた。それを引き継ぐ形で、1994年、旧足助町と「足助まちづくりの会」は、「足助の街づくりに関する要綱」及び「足助の街づくり規範」を制定し、修景基準を定めた。その「要綱」及び「規範」がつくられた背景は、家屋の老朽化が進み、新築、改築により町並みに変化が生じ、修景の基準を作成することが緊急の課題となってきたことにある。そこで示された基本的な考え方は、住民の日常生活を優先させた上での保存・修景を行い、魅力ある町並みを形成していくことであった。その上で、景観ガイドラインを作成し、町屋の改築・新築の際には意匠・材料・色彩

について専門の建築士のアドバイスを受けられるようにしている¹⁴⁾。

④「街なみ環境整備事業」

「重伝建」選定に向けての活動を断念した後、旧足助町と「足助まちづくりの会」は、新たなまちづくりの方向を探ることになり、建設省（現国土交通省）の「街なみ環境整備事業」¹⁵⁾の補助金を利用し、「足助らしさを活かすまちづくり事業」を実行することになった。当初は、補助金を受けるために、国の指導で環境保全条例の制定が検討されたが、全町の同意を得ることが難しいと断念し、「要綱」「規範」をつくることに落ち着いた。その後、「足助まちづくりの会」が補助金の受け皿的な役割を担うことになり、「街なみ環境整備事業」は進められていった。

「街なみ環境整備事業」の補助金を受けた「足助らしさを活かすまちづくり事業」は、1995年度から2004年度までの10年間行われたが、「足助らしさを活かすまちづくり事業」に先だって、1994年度に建設省（現国交省）の「街なみデザイン推進事業」の補助金を受けて、修景方法など町並みデザインの手引き書を作成した。これが「要綱」や「規範」に繋がっていった。「足助らしさを活かすまちづくり事業」の事業内容は、小公園の設置3件、郷倉や区民館の新築など5件、えびや小路など道路の石畳化など21件、個人住宅の修景が34件で、補助対象事業額の総計3億5,747万9,000円で、国の補助額は総額の2分の1の金額であった。事業の主体は旧足助町であったが、内容については住民や「足助まちづくりの会」が意見やアイデアを出している。しかし一方では、小路の石畳化、民家の修景方法については批判もある。

以上のように、足助の町並み保存運動は、文化庁の補助事業への道を断念し、建設省の補助事業を受けての景観整備へと転換して行くこととなった。「まちづくりの会」は、「街なみ環境整備事業」の補助事業の単なる受け皿の役割を果たすことが主要な活動になり、積極的な町並み保存や景観づくりに主要な役割を果たすことのないまま、2005年、「街なみ環境整備事業」の補助事業が終了すると同時に解散した。2005年の豊田市との合併後、豊田市の「まちづくり交付金」を受けて中部地区7町で構成される「地域づくり委員会」が、地域づくりの一つとして、新たなまちづくりを模索しているが、現在まだ具体化はされていない。

（2）中心市街地の活性化

①中心市街地活性化委員会

わが国は1990年代以降、都市中心部の商店街の衰退、大型店舗の撤退や郊外移転、都市機能の郊外移転等が進行し、いわゆる「都心の空洞化」が著しくなった。このような背景のもと、国は1998年、「中心市街地活性化法」¹⁶⁾を制定し、中心市街地の活性化に取り組むことになった。それを受け、旧足助町においても1999年、「中心市街地活性化委員会」（以下「活性化委員会」という）がつくられ¹⁷⁾、中心市街地の活性化に取り組んできた。2003年3月には「足助町中心市街地活性化基本計画」が策定された¹⁸⁾。「活性化委員会」は、西町の旧渡辺邸をまちづくりの拠点施設として活用することを、中心的な取り組みとして活動を展開してきた。

②有限会社あすけ町づくり工房

中部地区の西町にある旧渡辺邸は明治中期の建物で、足助の町屋に最も多くみられる平入り二階建てである。2003年12月、旧渡辺邸を町当局が約8,000万円で購入し、その再利用が「活性化委員会」にまかされた。それを受け、「活性化委員会」はまちづくり新会社設立に動きだし、新会社「有限会社あすけ町づくり工房」が、2004年12月10日に資本金575万円で発足した¹⁹⁾。2005年10月、旧渡辺邸は改修され、「塩の道づれ家」としてオープンし、現在、飲食部門中心に営業が行われている。「塩の道づれ家」のモットーは「地産地消」であり、足助の食文化の情報発信の中心的存在となることを目指している。素材については、足助が塩の道によって栄えたことに因み、塩にこだわること、地元の無農薬野菜を使用することなど、食材にこだわったメニューを用意している。また、「塩の道づれ家」の2階部分にはギャラリーを設け、各種の展示会開催などのため町民に貸し出すスペースとなっている。収益の点では、2年間で黒字になることを予定している。今後、「有限会社あすけ町づくり工房」は、①塩や地元の食材を使う「スローフード塾」の開設、②イベントを仕掛け観光客を呼び込む、③町並みを活かした活動を行う、④文化の発信基地、の4点を将来の方向として掲げ、まちづくりの拠点となることを目指している。「有限会社あすけ町づくり工房」が、中心市街地の活性化にどのように役立っていくかは未知数であるが、今後、文化を活かしたまちづくりの一翼を担うことは間違いないであろう。

③AT21 倶楽部

AT21 倶楽部²⁰⁾は「Asuke Tourism 21世紀倶楽部」(以下「AT21」という)の略称であり、1992年に発足した組織である。活動の目的は、「足助のこれからの観光を考える」ことであつた。倶楽部員は、観光協会の会員及び目的に賛同する人で、主として若手の観光関連業種の商店主で構成されている。自由に動きたいという気持ちから結成された組織である。AT21は商店街の活性化のために、積極的にイベントを開催し、観光客を足助に招き入れている。「AT21」主催の主な行事としては、1月の「七草粥」、2、3月の「中馬のおひなさん」²¹⁾、9月の「月見の宴」と「足助のまちじゅう博物館～懐かしの路地裏巡り～」などがある。

2月～3月にかけて行われる中馬のおひなさんは、2005年で7回目となるが、1か月の会期中、数万人が足助を訪れ、中心商店街の活性化に大いに役立っている催しである。もともとは、郷土資料館に収蔵されていた、足助地方に伝わる土びなを本町公民館に飾ったことから始まった行事である。現在は中馬街道沿いの120軒余の商家や民家に約3,800体のおひなさまを飾る行事にまで発展している。2005年は約5万人の人出があり、春の最大の観光行事として定着している。この催しは、住民自らも楽しみ、来訪者の満足度も高くかつ経済的効果が著しく大きい行事であり、現在では町をあげてのイベントとなっている。

この取り組みは、文化を活かしたまちづくりであり、まちづくりの起爆剤となった。

3 足助のまちづくりの課題

本研究の目的は、旧足助町の歴史的・文化的遺産を活かした地域づくり・まちづくりの具体的な取り組み状況を述べ、その課題や問題点を整理し、考察をすることである。その課題や問

題点を明らかにするために、インタビュー調査を実施してきた。以下、インタビュー調査をもとに、地域住民の声にふれつつ、旧足助町の地域づくり・まちづくりの課題・問題点を述べる。

（１）「足助まちづくりの会」の今後

「足助まちづくりの会」の活動は、町並み修景の自主規制である「要綱」及び「規範」が制定された後は、まちづくりに積極的な役割を果たすことがなくなった。この間、「街なみ環境整備事業制度」を利用し、足助祭りの山車を収蔵する郷蔵の改修、ポケットパークの整備、小路の石畳敷込工事などの各種事業が行われた。その事業が町並み修景に果たした役割は大きいですが、今後のまちづくりの方向性が見つかったかという疑問も残る。建設省（現国土交通省）の「街なみ環境整備事業」の補助事業の 2004 年度終了に伴い、再度「重伝建」の選定を目指したい、という意見は一部にとどまり、結局、実現することはなかった。今後は、「まちづくりの会」の活動を引き継いだ「中部地区地域づくり委員会」が、町並み保存とまちづくりについて、いかなる理念を持ち、どのような運動をつくり出すかが課題である。と同時に、まちづくりの後継者をいかにつくりだすかも課題である。1990 年代までの運動の担い手である第一世代は、70~80 歳代と高齢化してきたこともあり、町並みの修景とまちづくり運動を後継者である 40~50 歳代の第二世代にどう引き継いでいくのかが、今後のまちづくりの鍵を握ることになる²²⁾。

（２）中心商店街は再び賑わいを取り戻せるか

足助の町がその賑わいを失ってから久しい。昭和 30 年代から 40 年代前半にかけては、町並みに人が溢れるような状態も珍しくなかったという。これは、インタビュー調査の中でもしばしば聞かれた言葉である²³⁾。旧足助町が再びかつての賑わいを取り戻すことが可能であろうか。インタビューでは、「中心商店街の活性化は無理であろう」という悲観的な意見を持つ住民が多い²⁴⁾。中心商店街に人が来なくなって久しい。シャッターが降りたままであったり、駐車場になっているところも多い。また、後継者のいない商店は廃業せざるをえない。従って、再び賑わいのある町にすることは無理であろう、という意見である。それでも何とかしたいという意見も聞かれた。どの様にして、再び町に賑わいを取り戻すかが第一の課題である。日常生活の中での活性化が無理であるとするなら、町並みに人を呼ぶ方策は観光に頼らざるをえない。

現在、「AT21」や「有限会社あすけ町づくり工房」などが、かつての中心商店街の賑わいをどう取り戻すか、という課題を持って中心市街地の活性化やまちづくりに取り組んでいる。「AT21」と足助観光協会の共催による「中馬のおひなさん」は、数万人の観光客が訪れる一大イベントになっている。このイベントをきっかけに観光客が、足助の町並やたたずまいの良さに気づき、二度三度と訪れるケースも増えつつある。また、「ぬくもりの会」²⁵⁾の活動など住民たちの努力は少しずつではあるが実を結びつつある。一方で、このイベントは予測を超える拡大で、駐車場やトイレ不足など不備が目立ち、条件整備が追いつかない面もみられる。また、固定客を持つ店では、期間中の交通規制が迷惑になると、不満を漏らすこともある。これらの点をどう解決するかも今後の課題である。「有限会社あすけ町づくり工房」による「塩の

道づれ家」については、経営が安定するかどうかは不明である。その成功が、「スローフード塾」を開設する、観光客を呼び込む、文化の発信基地となるなど「有限会社あすけ町づくり工房」の目標実現の鍵となるであろう。関係者の熱意が実を結ぶことを期待したい。

おわりに

旧足助町は、少子・高齢化の進行する町である。それは、中心地、周辺問わず進行している。そのことは、今後の地域づくり・まちづくりに厳しい環境となる。しかし、本文で述べてきたように、足助には、地域づくりやまちづくりの伝統やさまざまな実践がある。今後より激しさを増す環境の変化の中で、これまでの取り組みをいかに発展させるかを考えることが大切であろう。

足助のまちづくりは、「まちづくりの会」「AT21 倶楽部」「中心市街地活性化委員会」などのメンバーが、行政と協働する中で行われてきた。そのような、中心を担ってきた人々を含め、足助の住民のまちづくりの活動の中に、足助をよくしたい、足助を愛したい、盛り上げていきたいという思いがあふれていた。この点を筆者は、足助町の調査の中で強く感じた。このような人々の思いがある限り、今後も足助のまちづくりは進んでいくだろう、と思われる。以上を結論として、本稿のまとめとしたい。

謝辞

本稿をまとめるに当たって、旧足助町の行政担当者、商工会担当者、中心市街地活性化委員会、中心商店街の商店主、高校生・大学生の若い人達にご協力いただきました。感謝申し上げます。また、論文作成のうえで、いくつかのアドバイスをいただき、ご指導いただいた谷澤明教授に感謝申し上げます。

注：

- 1) 「まちづくり」という用語には、明確な定義はないが、筆者は、「住民が、快適で暮らしやすい町を住民自らの手でつくり、それを次の世代に伝えていく作業である。」と定義付ける。三船康道（2004）は「まちづくりを定義付けることは大変難しい問題だと思います。専門家の間でも統一的な見解を考えようという意見も聞くこともあります。今使われている現状を考えると、定義することは難しい」（三船康道「まちづくりってなに？」季刊『まちづくり』創刊号 108 ページ 2003 年 株式会社学芸出版）と述べ、専門家の間でも見解が一致していないことを指摘している。三船以外にも佐藤滋（2004）は「まちづくりとは、地域社会に存在する資源を基礎として、多様な主体が連携・協力して、身近な居住環境を漸進的に改善し、まちの活力と魅力を高め、『生活の質の向上』を実現するための一連の持続的な活動である。」（日本建築学会編『まちづくり教科書 第1巻 まちづくりの方法』3 ページ 丸善株式会社）と述べている。また、後藤春彦（2000）は「地域で暮らしを営む人々が生活環境や伝統文化などの潜在的な可能性を追求することにより、経済的自立性を手に入れるとともに地域社会に立脚したゆとりある生活をめざすこと」（後藤春彦『まちづくり批評—愛知県足助町の地域遺産を読む』139～140 ページ 株式会社ビオシティ）と指摘し、田村明（1987）は「一口で言ってしまうと、『まちづくり』とは、一定の地域に住む人々が、自分たちの生活を考え、便利に、より人間らしく生活していくための共同の場をいかにつくるかということである。その共同の場こそが『まち』である。」（田村明『まちづくりの発想』52～53 ページ 岩波新書）と述べている。
- 2) 中馬街道の中馬には、諸説があるが、江戸時代に信州の馬子がつくった同業組合で、賃馬、中継馬が語源との説が有力である。
- 3) 1978 年 4 月 22・23 両日、全国町並み保存連盟（1974 年結成）の主催により、旧足助町と名古屋市有松町

- で「第1回全国町並みゼミ」が行なわれた。
- 4) 旧足助町のまちづくりに関しての研究としては、後藤春彦の「まちづくり批評（クリティーク）－愛知県足助町の地域遺産を読む」（2000年）がある。この文献には、早稲田大学後藤研究室が1999年に実施した足助町での聞き取り調査の記録と、同年に行ったシンポジウムの記録が述べられている。その中で後藤は、足助に暮らす住民の日常生活にある歴史をインタビューにより明らかにし、その歴史が足助に息づく共通の記憶、すなわち「地域遺産」として後世に伝えられていくべきものであり、そこにまちづくりの精神があると述べている。研究の視点や方法には学ぶところが多い（後藤春彦『まちづくり批評（クリティーク）－愛知県足助町の地域遺産を読む』2000年 株式会社ビオシティ）。その他、松波秀子の「よみがえる山の生活と街道の町」『事例地方自治』第7巻 歴史的環境 ほるぷ出版（1983年）や、後藤淳子の「中山間地域の現状とむらおこし－愛知県足助町を事例として－」『農業問題研究』第41号（1995年）がある。また、足助町が重要伝統的建造物群保存地区選定のための基礎資料として作成した「足助の町並み－伝統的建造物群保存地区調査報告－」（1978年）がある。この報告は、町並みの特徴や伊奈（伊那）街道に沿う代表的な町屋36戸の建築学的調査を中心にしているが、内容は足助の歴史及び 現況、文化財など多岐にわたっており、足助の町並みを理解する上では格好の文献である。
 - 5) 伊奈街道は伊那街道とも記し、明治以降は飯田街道の名称で呼ばれている。飯田街道は現在の国道153号線と重なるが、国道153号線は足助の中心部を避けて通っている。また、伊奈街道は善光寺参りの街道としても利用されたため、「善光寺街道」とも呼ばれる。
 - 6) 1978年の足助町の町並みに関する調査では、中馬街道沿いの町屋319軒のうち36%に当たる115軒が江戸末期から明治期の建築であることが明らかにされている。なお、足助は1775（安永4）年の大火で町の大半が焼失している。（足助町『足助の町並み－伝統的建造物群保存地区調査報告』36ページ 1978年）
 - 7) 紅葉シーズンの11月に足助を訪れる観光客は約70万人で、年間の観光客数の約半分を占める。香嵐渓は足助町の観光の最大の目玉となっているが、一方で、交通渋滞などの問題もある。（『Asuke ミニ統計 2001』足助町企画課 平成13年3月）
 - 8) 足助屋敷の設立に大きく貢献したのが当時町観光係長の小澤庄一であった。小澤は、各地の資料館を見学し、足助では作り物でなく、炭焼き、木地屋、紙漉き、傘張り、下駄屋、機織りなど本物の山村の技術を生きた人間が実際に行う「山村民俗資料館」をつくらうと決意した。建設途中で「採算が取れるのか」などの疑問が出されたが、1980年に完成した。初年度の入場者数約12万人、その後も順調に入場者を増やしている。初代の職人たちが亡くなったり、引退した後も炭焼きや藍染め、和傘づくりでは技術を受けつぐ若手の後継者が育っている。三州足助屋敷建設の経緯については、松波秀子の「よみがえる山の生活と街道の町」『事例地方自治』第7巻 歴史的環境 ほるぷ出版（1983年）に詳しい。
 - 9) 丸山豊（1971）「在郷町足助の研究」によれば、足助の塩問屋は江戸時代には14軒あったという。また、足助町文化財保護審議委員の鈴木茂夫さんは、「足助の塩というのが、実際には塩を売買していたわけではない。足助に運ばれる塩は岡崎の塩座が押さえていて、足助の商人は扱えなかった。足助では船で運んできた塩の積み直しをした。それを『足助直し』と呼び、積み直しの手数料を取って商売していた。塩問屋は14軒とあるが、それらは専門の塩問屋ではなく他の商売が本業で、塩の中継はその片手間にやっていた。だから、問屋といってもパッケージをかえていたのみであり、その手数料を得ていたにすぎない。」と語った。
 - 10) 中馬のおひなさんは「AT21 倶楽部」主催で1995年から始まった行事であるが、この経緯については『地域イベントが小さな町の商店街活性化に及ぼす効果の研究－文化経済学的視点からの考察－』（「中馬のおひなさん研究会」代表 井口貢（京都橘女子大学）ほか 財団法人サントリー文化財団 2002年度人文科学、社会科学に関する研究助成事業 平成15年）に詳しく述べられている。
 - 11) 各報告書には、1977年3月、「足助町町並み調査概報」（名古屋大学建築学教室）、同年6月「足助の町並み－重要伝統的建造物群保存地区調査報告」（足助町町並み保存対策協議会 会長 城戸久名城大学教授）がある。
 - 12) 足助の町並みを守る会編「足助の町並み保存運動のあゆみ」（1986年発行）より引用。「足助の町並み保存運動のあゆみ」には、この間の経緯が詳しく述べられている。
 - 13) 1983年3月26日、「守る会」総会の席上で会長の田口金八さんは「私たちの町並みは、私たちの手で守らなければ、だれも守ってくれません。観光とか商売とかも超えたところで、とにかく私たちの住んでいるこの町並みを守って、未来に伝えていくのが私たちの役目だと思うのです。」（足助の町並みを守る会編「足助の町並み保存運動のあゆみ」より）と述べている。
 - 14) 町屋の建築様式として、足助らしさを活かすために、切り妻・瓦屋根・白壁の日本家屋にすることを勧めており、個人の家屋に対しては、住環境整備を工夫・実践する活動に要する経費として新築では最高200万円までの補助金が支給された。また、「守る会」発足後の10年間に新築・改築・改装された家屋は約50棟で、大半は自主規制で建築された。（足助まちづくりの会『足助らしさを活かす街づくり事業』1994年より）
 - 15) 街並み環境整備事業とは「住宅地区改良事業が想定している地区よりも物的状況が良い中間的住環境水準

- を対象とする事業である。具体的には、良好な町並み形成のための活動、計画策定、修景施設の整備などが行われる。」(三船康道『まちづくりキーワード事典 第二版』学芸出版社 2002年 58ページより)。
足助町では、「街なみ環境整備事業制度」を活用した補助金は、1995年度から10年間の補助事業で、新町と西町の郷蔵の改修、陣屋道の石畳敷込、ポケットパークの整備及び個人の家の改修に使われてきた。なお、この補助事業は2004年度で終了した。
- 16) 1998年施行された「中心地における市街地の整備改善及び商業等の活性化の一体的推進に関する法律」(以下「中心市街地活性化法」という)は、第一条(目的)で「都市機能の増進及び経済活力の向上を図ることが必要であると認められる中心市街地について、……市街地の整備改善及び商業等の活性化を一体的に推進するための措置を講ずる」と述べている。この中心市街地活性化法に基づき、「活性化基本計画」を立案した地区は2006年1月4日現在で、620市区町村、683地区にのぼっている。(国土交通省中心市街地活性化推進室ホームページより)
 - 17) 「中心市街地活性化委員会」の発足当初の活動は「基本計画」の立案・実行であり、実際の活動開始は商工会副会長の小松正伸さんが現在の委員長になった2002年以降のことである。
 - 18) 基本計画では、活性化重点地区を中部地区内の西町、新町、本町、田町の4地区とし、①山里足助の歴史や自然の魅力を活かした歩きたくなるまちづくり、②山里足助ならではの特色を活かした魅力ある商業環境の形成、③山里足助の伝統的文化と調和する暮らしやすいまちづくり、の3点を重点目標とした。また、商業の停滞や、人口の減少が中心市街地の衰退を招いたとし、その解決策として、まちづくりの拠点をつくり、中心市街地に活気を取り戻すことを目指した。
 - 19) 当初はTMOとして発足する予定であったが、設立が豊田市との合併後で、1市町村1TMOという原則から、実現できなかった。
 - 20) 「AT21倶楽部」については、三州足助屋敷館長の縄手雅守(1998)が「(AT21倶楽部とは)『Asuke Tourism21世紀倶楽部』の略称で、『足助の21世紀の観光を考える会』という意味である。通称『アット』といい、平成5年4月に発足した。メンバーは町内の観光関係事業に関わる人で、20～40代の人という制限を付けた。40代というのは、年齢的には商工会青年部を卒業し、さりとて、各種団体の役員には早すぎるという、中途半端な世代である。しかし、社会的にも、実業的にも、最も脂ののっている時期で、活動の仕方によってはすごいパワーになる。世代的にも我々と似通っていて、21世紀の観光を展望する時、必ず中核になっていく人たちである。」と述べている。(縄手雅守『観光地づくり実践1 地域の主体性を活かしたイベントづくりー足助城月見の宴ー』(社)日本観光協会 1998年)
 - 21) 京都橘女子大学の井口貢助教授らによる調査では、地元への経済的な波及効果は約2億7,000万円にのぼるとされる(「中馬のおひなさん研究会」の調査による 2004年2月6日付「矢作新報」より)。しかし、「AT21」の部長を発足当初から務めている和菓子舗「両口屋」の佐久間章郎さんは、「マンネリ化は当然ある。いろいろと考えてはいるが、次の方向はまだ出ていない。今では私たちの手を離れて住民のお祭りになっており、小回りのきかない催し物になっている。」と語っている。
 - 22) 足助屋敷で炭焼きの後継者として働いている染谷等さんは県外の出身であるが、「今後のまちづくりに必要なのは後継者、若手の育成だ。若者は町を出て行けけれど、そこを克服しないとだめだ。ところが、話をしても若い人たちの意識は低い。町をどうしようというようなまじめな話にならない。そこを変えていくのは大変だけれど、何とかしなくては足助の未来はない。今一番必要なのは、若い人たちの意識を変えることだ。町をよくしていく素材はあるのだから。」と熱っぽく語った。
 - 23) 新町で呉服店を経営している坂田信吉さんの話によれば、商店の数は昭和30年代に比較して、現在は約半分に減ったという。
 - 24) 成瀬秀子さんは、「町の中心地の将来については、打つ手がないと思う。町なかでものを買うことが少なくなってきた。商売がよく成りつつているな、と思う。商店街の活性化は難しい。昔は通日も賑やかだったが、ここ数年でとみに寂しくなった。」と語っている。
 - 25) 2001年に17店舗の商店主により作られた会。業種は、民芸、成果、和菓子、呉服、書籍、米、茶、陶磁器、漬け物、金物、料亭など多岐に渡っている。女性を中心に運営されており、もてなしの心を重視し、足助へのリピーターを増やすことを活動の目的としている。会員の増田佐代子さん(生花店経営)は「新しいもの、きれいなものでなくてもいい。来訪者にちょっとした言葉をかけること、そこから始まり、よい印象を持って再び来てくれればいいと思っています。そんなつもりで観光客には接しています。」と語っている。

参考文献

足助町 『足助町誌』 1975 年

後藤春彦 『まちづくり批評（クリティーク）－愛知県足助町の地域 遺伝子を読む－』 株式会社ビオシティ
イ 2000 年

松波秀子 『よみがえる山の生活と街道の町』 「事例地方自治」第7巻 ほるぷ出版 1983 年

足助町 『足助の町並－伝統的建造物群保存地区調査報告－』 1978 年

足助の町並みを守る会 『シリーズ 町並み保存運動の展開 No. 2 足助の町並み保存運動のあゆみ』
1986 年

中馬のおひなさん研究会 『地域イベントが小さな町の商店街活性化に及ぼす効果の研究－文化経済学的視点
からの考察－』（「中馬のおひなさん研究会」代表 井口貢（京都橘女子大学）ほか 財団法人サントリー文
化財団 2002 年度人文科学、社会科学に関する研究助成事業 2003 年）